

平成22年度 越谷市民文化祭 第42回

平成22年11月20日(土)～23日(火)
10:00～19:00(最終日は18:00)

郷土研究の部・展示作品紹介

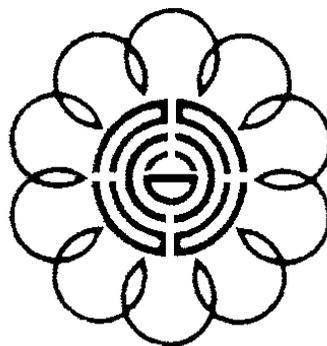
於 越谷コミュニティセンター 大ホールホワイエ

◇周りの10個の輪は、昭和29年(1954)11月3日に

合併した十町村である二町八ヶ村(「越谷町」誕生)を表す。

ちょうそん こしがやまち おおさわまち さくらむら にいがたむら
十町村とは、越ヶ谷町・大沢町・桜井村・新方村・
ましばやしむら おおぶくろむら おぎしまむら でわむら がもうむら おおさがみむら
増林村・大袋村・荻島村・出羽村・蒲生村・大相模村
をさす。

◇中央部周りのデザインは、カタカナの『コ』を4個集めた
ものである。つまり、越谷の『越』(「コ4」)を意味する。



◇中心部のデザインは、越谷の『谷』の文字を図案化したもの
である。

◇昭和30年(1955)11月3日には、草加町に合併して
かわやなぎむら いはら むぎつか うわや
いた川柳村のうち、伊原・麦塚・上谷が越谷町に入る。

◇越谷町は、昭和33年(1958)11月3日に市に昇格し、
越谷市となり、現在に至る。

- | | | | |
|------------------------|------|---------------------------------------|------|
| 1. 越谷のわらべ歌 | 岩瀬静江 | 5. 越谷市の明治の水準点「高低測量 ^{きごう} 几号」 | 秦野秀明 |
| 2. 越谷宿を通った弥次さん、喜多さん | 篠原陸郎 | 6. 明治の大袋村観音山の捕り物一件 | 原田民自 |
| 3. 画家・斎藤豊作、フランスのシャトーと墓 | 竹村克男 | 7. 下間久里の獅子舞と辻切り | 増岡武司 |
| 4. 明治になって越谷に鷹狩に来た徳川慶喜 | 田中利昌 | 8. 越谷の江戸時代の名物は焼き米(煎餅)と鰻 | 宮川 進 |

NPO法人 越谷市郷土研究会 作成

1. 越谷のわらべ歌（大沢町）

岩瀬 静江

戦前・戦後の越谷市内の大沢町にかつて見られた「わらべ歌」などを紹介します。

《まりつき》

1. 東武線 手まり歌

1番 こしがや（越ヶ谷） がもう（蒲生）

しんでん（新田） そうか（草加）

やつか（谷塚） たけのづか（竹ノ塚）

にしあらい（西新井） うめじま（梅島）

ごたんの（五反野）

お次は きたせんじゅ（北千住）

なかせんじゅ（中千住）

2番 うしだ（牛田） ほりきり（堀切）

かねがふち（鐘ヶ淵） たまのい（玉の井）

ひきふね（曳舟） うけぢ（請地）

なりひらばし（業平橋）

すみだこえん（隅田公園） お次は

あさくさかみなりもん（浅草雷門）

※「中千住駅」「請地駅」「隅田公園駅」は、今はありません。

※「玉の井駅」は東向島駅、「浅草雷門駅」は

浅草駅と改称しています。「隅田公園」の「公園」

は「こえん」と歌っていました。

2. 「あんたがた どいや」

あんたがた どいや

肥後さ

肥後 どいさ

熊本さ

熊本 どいさ

せんばさ

せんば山には狸がおつてさ

それを猟師が鉄砲で撃つてさ

煮てさ 焼いてさ 食つてさ

それを木（こ）の葉でちよいと隠せ

※「せんば山」とは、城下町熊本市内にあった「洗

馬山」を指すとされています。

※最後の「ちよいと隠せ」では、毬を両脚の間から後方へスカートの中へ瞬時にくぐらせ、後ろ手でスカートの上からその毬を落とさないように押さええます。幼い子や難しい子はスカートの前で押さええます。

3. 「いちで たちばな」

一（いち）で橘 二（に）にカキツバタ

三（さん）で桜・藤 四（し）し獅子・牡丹

五つ イロハは 六つ 紫

七つ 菜の花 八つ 八重桜

九つ 小梅は 色よく染まり

十（とお）で、殿様 お馬に乗るおか

お駕籠に乗るおか おもかしよ 一ちようよ

※「四（し）」は「とするところを、大沢町では「四（し）」と歌っていました。

※「おもかしよ」は、「重い」の意味かと思えます。

4. 「しなのまちの しなのこ」（親のない子は）

支那（しな）の街の 支那の子

親のない子は 只一人

売られて行きます 上海（シャンハイ）へ

坊やの良い子だ 寝んねしな

坊やのお里は あの山を

越えてあなたの 花の村

母さん 匪賊（ひぞく）にさらわれて

遠い 満州へ 行っちゃった

※こんな残酷な歌でも、考えもなしに毬つきしていたのです。私の子どもの頃は、妹や弟のお守をしながら、大きい子も小さい子も一緒に遊びながら遊びや歌を覚ええました。

5. 「しなのまちの しなのこ」（親がないとて）

支那（しな）の街の 支那の子

親がないとて 馬鹿にすな

親はおります 極楽に

白いべべ着て 数珠持つて

石を枕に 寝ています

6. 「白瀬中佐」

1番 轟く筒音 飛び来る弾丸

荒波あろう デッキの上で

闇を貫く 中佐の叫び

杉野はいずこ 杉野はいずや

2番 船内くまなく 尋ねる三度（みたび）

呼べど答えず 探せど見えず

船は次第に 波間に沈み

敵弾いよいよ あたりにしげし

※小学校上級生たちが、毬つきをやっていたのを見ました（終戦前）。

戦後は、軍歌などを歌うのは禁止される時世になったので、これも歌わなくなりました。

※3番(今はとポートに〜)まであるそうです。

《羽根つき》

7. 「ひとりきな ふたりきな」

一人来な 二人来な 三人来な 寄って来な
いつ来ても むずかし

南無妙薬師 (なんみようやくし)

ここのよで 十(とお)よ

※明治十七年生まれ祖母から聞きました。「南無妙薬師」は「何の薬師」と歌う所もあるそうです。

8. 「おいばね しばね」

追羽根(おいばね) 小羽根(こばね)

蝶々になって ひらひら遊べ

ひい ふう みい よお いつつで渡そ

花子さんに 渡そ

《お手玉》

越谷の大沢地区では、「お手玉」のことを「ナツコ」と呼んでいました。実際には、お手玉の中身は、「あずき」や「じゅず」(数珠玉)でした。

9. 「いちれつ らんぱん」

一列らんぱん 破裂して

日露戦争始まった

サッサと逃げるはロシアの兵

死んでも尽くすは日本の兵

五万の兵を引き連れて

六人までも皆殺し

七月八日の戦いに

ハルピンまでも攻め入って

クロバタキン(クロバトキン)の首をとり

東郷元帥 万々歳

※「らんぱん」は、「談判」がなまったものです。大

沢町では「らんぱん」と発音しました。

※「六人までも」は、他では「六人残して」となっているところもあるそうです。

※クロバタキンは、クロバトキンのこと。ロシアの將軍で、日露戦争では満州軍総司令官を務めました。

歌の内容は歴史的事実とは違っていますのでご注意ください。

※「東郷元帥」は、他では「東郷大将」と歌う例もあるそうです。

10. 「いちばんはじめは いちのみや」

一番初めは 一の宮

二は 日光東照宮

三は 佐倉の宗五郎(そうごろう)

四(し)は 又、信濃の善光寺

五つは 出雲の大社(おおやしろ)

六つ 村々 鎮守様

七つ 成田の不動様

八つ 八幡(やわた)の八幡宮(はちまんぐう)

九つ 高野の弘法様(こうぼう)

十(とお)で東京博覧会

※「八幡の八幡宮」とは京都府八幡市(やわたし)の石清水八幡宮をさすそうです。

※「東京博覧会」は、「東京招魂社」と歌う例も見られたそうです。

※十の後も続けてお手玉で歌うことがありました。

十一 いちごのごまめいり

十二は 日光 中禅寺

十三 三十三間堂

十四(じゅうし)は 四国の金毘羅さんこんびら

十五は ごうごう汽車の音

十六 ロシアの大戦争だい

十七 しちしの墓参り

十八 浜辺の白兎

十九は 楠正成よ

二十は 二宮金次郎 金次郎

※「いちごのごまめいり」は、「越後」「参り」の意味だと思えます。

※「しちしの」は、「四十七士の」の意味です。

※最後の二十は、「金次郎」を長く伸ばし、もう一度長く「金次郎」と歌います。

11. 「おつみびと(お俊)

おつさらい お一つ お一つ (繰り返して一つずつ

片手で取る) 降ろして

おつさらい お二つ お二つ (繰り返して二つずつ

片手で取る) 降ろして

おつさらい お三つ お三つ (繰り返して三つずつ

片手で取る) 降ろして

(これを決められた数まで繰り返して行う)

おつさらい お全部(右手で取る) 降ろして

(次は、順不同でいろいろと変化して行なう)

おっさらい お手載せ お手載せ（「お手載せ」を繰り返して、全部を左の手の甲に載せる）

降ろして

おっさらい おつかみ おつかみ（繰り返して、全部を左手で持つ） 降ろして

おっさらい おはさみ おはさみ（繰り返して、全部を左手の指の間にいくつも持つ）

降ろして おさらい

※「おっさらい」は、右手で一つ（親）を上方に上げて、その間に机の上にある全部のお手玉を両手でつかみ上げると同時に、上げて落ちてきた一つも受け取り、それを右手で持ったまま、その他の全部を机の上に降ろす。

最初に上げた一つは、その後も常に右手で持ちながら行なっていた。

《おはじき》

「おはじき」のことを私の祖母や母は「ギヤマ

ン」「キシヤゴ」などと呼んでいました。

12. 「なんこ なんこ」

何個（なんこ） 何個 合わせて いくつ

※複数で行います。それぞれが手の中に何個かのおはじき握って、「合わせていくつ」で一斉に握った手を出します。そして全部合わせた数を何個になるかを一人一人が答えます。その後、握った手を一斉に広げて、全部で合わせていくつかを数えます。当たった人は、皆が出したおはじきをすべて独り占めして手に入れます。

13. 「いちじく にんじん」

イチジク ニンジン サンショ（さんしょう）にシ
イタケ ゴボウ ムカゴ ナツメにヤマイモ ク
ワイにトウガン

※平らな所で行います。まず最初は、皆が同数を出し合って一か所に集めたおはじきを片手でおおい包んで、勢いを付けていっきに散ばします。散らばった中の二個を選び、そのおはじきの間に人差し指（狭い所では小指）で線を引き、人差し指（又は親指）でもう一方のおはじきを目指して、はねて当てます。その時、当てられたおはじきが動いて他のおはじきには当たらないようにします。当てたおはじきは自分のものになります。これを何度も繰り返しながらおはじきを自分の所有にしていきます。当てられたおはじきが、他のおはじきにあたりと失敗です。一方のおはじきに当らなくても当然失敗です。失敗するまで続けます。

※最後におはじきが二個残った時に、この歌が歌われます。残った二個のおはじきの間に指で線を引き、もう一方のおはじきを目指してはねて当てます。それを十回繰り返して、最後までできると、その二個のおはじきが手に入ります。

《縄跳び（複数で行う）》

14. 「おおなみ こなみ」

大波（おおなみ） 小波（こなみ） ぐるっと回して 猫の目

※二人で長い縄の両端を持って離れてから、「大波小波」では左右に振り、「ぐるっと回して」では、大きく回す。跳ぶ人は一人で、大波で入ります。

※最後の「目」のところで縄をまたいだ状態にして縄の動きを止めます。

15. 「ゆうびんやさん いまなんじ」

郵便屋さん 今何時

もう かれこれ 十二時だ

えっさか もっさか ゲーロゲロ

※これも同様に、二人が縄を持って、一人が跳びます。二人は縄を回すだけです。

※最後の「ゲロ」のところで縄をまたいだ状態にして縄の動きを止めます。

16. 「ゆうびんやさん おとしもの」

郵便屋さん 落し物

拾って下さい 一枚 二枚 三枚 …… 〇枚

※二人が縄を持ち一人が跳びながら落し物を拾うふりをして土に手をつきながら行う縄跳びです。

※跳ぶ前に、土に手を付ける回数を決めます。

跳び始めたら、その回数まで跳び、達成すると縄から外に出ます。同時に次に待っている人が縄に入り、同じことを繰り返します。

17. 「おじょうさん おはいんなさい」

お嬢さん お入んなさい

ジャンケンポンよ アイコでショ

勝ったら さっさと お逃げなさい

※最初は一人が跳んでいます。

※「お入んなさい」で待っているもう一人が縄に入り、跳びながら相手とジャンケンをします。

※勝ったら縄から出ます。勝つまでは縄から出られません。負け続けると、いつまでも跳んでいることになりません。

18. 「げっくり かっくり」

げっくり かっくり 水曜日
もっくり きん床 どっこいしょ 日曜日
山とせ そよふけば 山の神様 三大師
ピーヒョロ ピーヒョロ 三大師
そくれ そくれ 入れ 入れ 出る 出る

《人の輪を作つての遊び（鬼が中央にいる）》

19. 「かごめ かごめ」

かごめ かごめ 籠の中の鳥は
いつ いつ 出やる
夜明けの晩に 鶴と亀とすべった
後ろの正面 だくれ

※野田市が発祥の地と言われています。東武野田線の清水公園駅の前に「かごめの唄の碑」が建っています。

※鬼が両手で目を隠して中央に座り、その周囲を他の子どもたちが手をつなぎ、輪になって歌を歌いながら廻ります。歌が終わると一斉に座ります。その時、鬼は自分の真後ろにいる人を当てます。

※「かごめ」とは、籠目、つまり竹で編まれた籠の編み目を表すとか、「囲め」がなまったものとか、「屈め」がなまったものなどの説があります。

20. 「坊さん 坊さん」

（輪の人たち） 坊さん 坊さん どこ行くの
（鬼） 私は田んぼに 稲刈りに
（輪の人たち） 私も一緒に 連れしゃんせ
（鬼） お前が来ると 邪魔になる
（輪の人たち） なんだ このくそ坊主
後ろの正面 だくれ

※大沢町では、「かごめ かごめ」の遊び方と全く同じで、鬼が両手で目を隠して中央に座り、その周囲を他の子どもたちが手をつなぎ、輪になって歌を歌いながら廻ります。

※歌が終わると一斉に座ります。その時、鬼は自分の真後ろにいる人を当てます。

※他の地域での「坊さん 坊さん」の遊び方を調べますと、「なんだ このくそ坊主」の表現は多少違っていて（例えば「このカンカン坊主くそ坊主」というように）、次のようなことも行われていたそうです。

「くそ坊主」のところで、輪の子はつないでいた手をはなし、鬼の頭をつつきます。それから「後ろの

正面だくれ」で止まります。鬼は目隠しのまま自分の後ろにいる人の体を触って名前を当てます。当てられた人が次は鬼になります。

大沢町では、「小豆たった」で行ないました。

21. 「小豆たった 煮え立った」

（輪の人たち）
小豆たった 煮い立った
煮いたかどうか 食ってみよ
（輪の人たちが鬼のそばに寄る）
まだ煮えない コーリコリ（後ろに下がる）
もう煮いたかな（鬼のそばに寄る）
まだ煮えない コーリコリ（後ろに下がる）
（以上を輪の人たちは何回か繰り返す）

（輪の人たちが）「もう煮いたかな」

（鬼が）「煮えた」

（と言うと、輪の人たちは鬼から逃げる）

※「煮いたかどうか食ってみよ」で、真ん中にいる鬼のそばに寄っていきます。

「もう煮いたかな」で、鬼の人の頭を突いたり、髪の毛をくちやくちやにします。

※鬼が「煮えた」と言ったら、皆、蜘蛛の子を散らすように逃げます。鬼に捕まった人が鬼になります。

《人の輪を作つての遊び（トンネルくぐり）》

22. 「通りゃんせ」

A B 通りゃんせ 通りゃんせ
A ここは どうこの細道じゃ
B 天神様の細道じゃ
A ちよつと通してくだしゃんせ
B ご用のない者 通しやせぬ
A この子の七つのお祝いに
お札（ふだ）をおさめに 参ります
A B 行きはよいよい 帰りは怖い
怖いながらも 通りゃんせ 通りゃんせ

※A B二人が向かいあって両手を斜め上方にだしてトンネルを作り、その他の人は電車遊びのような体制になって一列につながり、そのトンネルの中をくぐって走りながら進みます。最後の歌の「怖いながらも 通りゃんせ 通りゃんせ」はゆっくり歌いながら、「通りゃんせ 通りゃんせ」で、両手で作ったトンネルを下方に降ろします。その時にトンネルの中に入って捕まった者が、トンネルの役に回ります。

《二組に分かれて列を作つての遊び》

23

ふるさとまとめて 花いちもんめ (始まりの歌)

やれやれ やれやれ 今日 (こんにち) は

隣のおばさん ちよつとおいで

鬼が恐くて行かない

お釜かぶつて ちよつとおいで

お釜ないから行かない

それもそうだが あの子が欲しい

あの子じゃ わからん

この子が欲しい

この子じゃ わからん

丸くなつて相談だ

○ ○ちゃんが欲しいよ 花いちもんめ

□ □ちゃんが欲しいよ 花いちもんめ

(名前が呼ばれた子が前に出てきて、

互いに引つ張り合う)

勝つてうれしい 花いちもんめ

負けてくやしい 花いちもんめ

※二組に分かれて手をつないで横一列になり、横一列になった二組が向かい合います。

※互いに問いかけるたびに前進 (相手側はその時は後進) を繰り返し、前進のたびに片足を蹴り上げます。

※「欲しいよ」と指名された双方の二人が前に出て、手を握つて引つ張り合います。

そして、引つ張られて、一方の仲間に入ります。

その時、一方の仲間は勝ち、「勝つてうれしい 花

いちもんめ」と前進しながら歌い、「もんめ」で蹴り上げます。

負けた方の仲間は、「負けてくやしい 花いちもんめ」と前進しながら歌い、蹴り上げます。

※「いちもんめ」とは、重さのことで「一匁」のことです。

《子守歌》

24. 「ねんねんよう おいひのりや」

ねんねんよう おころりよ

坊やは良い子だ ねんねしな

坊やの子守は どこへ行った

あの山越えて 里へ行った

里のみやげに 何もろた

でんでん太鼓 (だいこ) に 笙 (しょう) の 笛

※子供を負んぶしながら歌った

《尻取り歌》

25. 「いろはに

金平糖 (こんぺいとう)」

いろはに金平糖

金平糖は甘い

甘いは砂糖

砂糖は白い

白いは兎

兎は跳ねる

跳ねるは蚤

蚤は赤い

赤いはルビー

ルビーは高い

高いは十二階

十二階は恐い

恐いはお化け

お化けは消える

消えるは電気

電気は光る

光るは親父 (おやじ) のはげ頭

※十二階とは、大正時代の浅草にあった十二階をさします。

※以上の他にも次のような尻取り歌もありました。

いろはに 金平糖

金平糖は甘い

甘いは砂糖

砂糖は白い

白いは兎

兎は跳ねる

跳ねるは蚤

蚤は赤い

赤いはホオズキ

ホオズキはなる

なるはおなら

おならはくさい

※あるいは、次の例もありました。

いろはに 金平糖

金平糖は甘い

甘いは砂糖

砂糖は白い

白いは雪

雪は冷たい

冷たいは氷

氷はとける

とけるはロウソク

ロウソクは光る

光るは親父のはげ頭

《手合わせ歌》

26. 「いかけ二かけて 三かけて」

いかけ二かけて 三かけて

四かけて五かけて 橋をかけ

橋の欄干 手を腰に

はるか向こうを 眺むれば

十七、八の 姉さんが

花と線香を 手に持って

姉さん 姉さん どこ行くの

わたしは九州 鹿児島

西郷隆盛 娘です

切腹なされた 父上の

お墓参りに 参ります

お墓の前で 手を合わせ

南無阿弥陀仏と 拝みます

拜んだあとから 幽霊が
ふくわり ふわりと

ジャンケンポン

※一つ一つ動作がともなうて歌われていました。

《指遊び(室内)》

27. 「ずいずい ずいずい」

ずいずいずいずい ずいずい ずいずい

茶壺に追われて どっぴんしゃん

抜けたら どんどこしよ

俵の鼠が 米食ってチュウ

チュウ チュウ チュウ

おとつあんが呼んでもおつかさんが呼んでも

行(ゆ) きっこなしよ

井戸の周りで お茶碗欠いたの だくれ

※片手を筒のようにして、もう一方の片手の人差し指で、隣の人の筒の中に入れる動作を繰り返す遊びです。

※「お茶壺道中」に関わる歌とする説があります。江戸時代、将軍家に献上する新茶を詰めた茶壺を運ぶ行列が見られましたが、大名行列同様に住民は土下座をしたといわれます。

この説によると、「胡麻味噌を磨っていると、お茶壺道中がやってきて、子どもたちを家の中に追いやりられ、戸をピシャリと閉められて、家の中で息を潜めてじっとしている。その間に、米をかじるネズミの鳴き声や、井戸端で茶碗が割れる音まで聞こえてくる。お茶壺道中が通り過ぎると、子どもたちは解放される。」というような内容であったと言われています。

28. 「子供と子供とけんかして」

子供と子供と 喧嘩して

薬屋さんが 止めたけど

なかなか なかなか 止まんねく

人様 笑う

親たちや 怒(おこ)る

※両手を合わせて行う指遊びです。

寒い時に火鉢にあたって行うことが多いです。

《指遊び(室内及び室外)》

29. 「ひらいた ひらいた」

開いた 開いた

何の花 開いた

蓮華の花 開いた

開いたと 思ったら

いつの間にか つくぼんだ

※頭の上で、両手で花びらの形を作り、開いたり、つくぼんだりの動作をして歌いました。

30. 「いとしの ぼたん」

今年の牡丹は よい牡丹

お耳をからげて スッポンポン

も一つからげて スッポンポン

※「お耳をからげて スッポンポン」では、両方の人差し指で両方の耳の周りをぐるぐる回して、「スッポンポン」で両手を叩いて払う動作をし、「も一つ」では、それを繰り返しました。

「指きり げんまん」

指切り げんまん

ウソついたら 針千本 飲めます

指切った

《相手の腕を使った手遊び》

31. 「おなべふ」

おなべふ おなべふ おなべふ(これを繰り返す)

※「おなべふ」を繰り返しながら、相手の手首から、両手で交互につかみ、肘まで進みます。

相手の腕の内側面を使います。

最後の終了場所で、「お」になったら「親孝行」、「な」なら「なまけもの」、「べ」なら「勉強家」、「ふ」なら「不良」と大きな声で言います。

32. 「東京都、日本橋」

東京都(相手の腕に人差し指で線を引く)

日本橋(二本の指でひっかく)

蛸殻町(全部の指でひっかく)

豚やの(平手でぶつ)

おつねさん(片手でつねる)

《かくれんぼ》

33. 「かくれんぼするもの よつとこび」

かくれんぼする者 寄つとこび

ジャンケンポンよ

あいこでしよ

もういいかい
ま〜だだよ
もういいかい
ま〜だだよ

(何度か繰り返す)

もうい〜かい
も〜い〜よ

※「あいこでしよ」で負けた人が鬼になります。

鬼は両手で両目をふさいで「もういいかい」を言い始めます。

「も〜い〜よ〜」で、鬼は探しに行きます。

《ジャンケン》

34. 「ジャンケン ポン」

ジャンケン ポン

※あいこになったら、「あいこでしよ」と言います。

※「グー」で勝った場合は、「グ・リ・コ」、「チョキ」

は「チ・ヨ・コ・レ・エ・ト」、「パー」は「パ・イ・ナ・ツ・プ・ル」と、勝った人が言いながら、大股でグーは三步、チョキは六歩、パーは六歩、前に進みます。

35. 「アイケン チ」

アイケン チ

※「ジャンケンポン」のことを、私が子供の頃は「アイケン チ」と言っていました。

《押しくら まんじゅう》

36. 「押しくら まんじゅう」

押しくら まんじゅう 押されて 泣くな

※寒い時に、体を暖めるために何人かが集まって行ないます。

丸くなって背中を中央に向けて押し合います。

《その他の歌遊び》

37. 「お月さま いくつ」

お月さま いくつ

十三 七つ まだ年(とし)は若いよ

この子を産んで だ〜れに抱かしよ

お方に抱かしよ

お方はどこ行った

あの山越えて 油買ひ 茶買ひに

油屋の前で すべって ころんで

油一升 こぼした

※お月様が出ている時に歌うことが多いようです。

※子守をしながらゆつくりと歌います。私も祖母の背中で聞いて覚えました。

38. 「うさぎ うさぎ」

(月を見ながら)

うさぎ うさぎ 何見て跳ねる

十五夜お月さん 見て跳〜ね

39. 「一二二つの赤ちゃん」

一つ二つの赤ちゃんが

三つ みかんを 食べすぎて

四つ 夜中に 腹(はら)こわし

五つ いつもの お医者さん

六つ 向こうの 看護婦さん

七つ 泣いても 間に合わない

八つ やつぱり 間に合わない

九つ ここで お母い(おともらい)

十で どうとう 死んじやった

※母から聞いて覚えた歌で、家で一人の時に、特にミルクを食べるときによく歌いました。

40. 「盆、盆、盆が来た」

盆 盆 盆が来た

あしたの晩から 寝らんねえ

※月遅れの八月のお盆の為に買ってもらった赤い提灯がうれしくて、お盆の夜に浴衣を着た数人の女の子で、提灯の中の小さいロウソクに火を付けて大沢の町の路地を歌いながら歩きました。

41. 「おおさむ いくつ」

おおさむ いくつ

山から小僧が 泣いてきた

何て言って 泣いてきた

寒いと言って 泣いてきた

※寒い時に、両腕を縮めて歌うことがありました。

42. 「ほっ ほっ ホタル来い」

ほっ ほっ ホタル来い

こっちの水は 甘いぞ

あっちの水は 苦いぞ

ほっ ほっ ホタル来い

※水が入っている頃の田んぼで、ホタルを見ながら、歌うこともありました。

43. 「てるてる坊主」

照る照る坊主 照る坊主
明日 天気にしておくれ

44. 「ごんべえさんの赤ちゃん」

権兵衛さんの赤ちゃん 風邪引いた
(これを三回ほど繰り返す)
それで 慌てて 湿布した

45. 「朝だ 四時半だ」

朝だ 四時半だ 弁当箱提げて
出て行くおやじの 姿を見れば
上はボロボロ 下もボロボロ
うちの親父は 土方の大将
一日(いちにち) 五銭の 安月給
※戦時中に大沢ではやった歌です。

46. 「からすが鳴くから 帰ろう」

カラスが 鳴くから 帰ろう
※別れるときに「アバナ またあした」などと言った。
戦後は、「バイバイ」となります

※遊びに飽きて遊びを止めるとき、「アバにする」と
言いました。

47. 「どれに しようかな」

どれに しようかな 神様の言うとおり
どれに しようかな 天神様の言うとおり
※たくさんある物の中から一つを選ぶ時の歌です。

48. 「上がり目 下がり目」

上がり目 下がり目
ぐるっと回して 猫の目
※赤ちゃんをあやす時に動作をとめないながら歌い
ました。

49. 「いの指 とまれ」

〇〇する者 この指 とまれ
※遊び仲間を集めるときに、人差し指を出して言いま
す。

50. 「そうだ村の村長さん」

そうだ そうだ
そうだ村の村長が 死んだそうだ
ソーダ飲んで 死んだそうだ
葬式饅頭 でっかいそうだ
※相手が「そうだ」という言葉が出た時に歌われます。

51. 「だるまさん ころんだ」

だるまさん ころんだ
※鬼が「だるまさん ころんだ」と言って後ろを振り
返り、動いている子を見つけます。見つかった子は捕
虜になります。一方で、全員鬼のそばに少しずつ近づ
いていきます。鬼のそばまできて、手をつないでいた
捕虜に「切った」と言っつないだ手を切つて、捕虜
も含めて鬼から逃げます。鬼は捕まえに行きます。

《絵かき歌》

52. 「おっと たまげた 蝸入道」

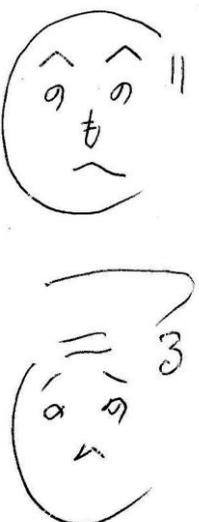
みみずが三匹 はつてきて
玉子が三つ ころがつて
雨がザアザア 降ってきて
あられがポツポツ 降ってきて
おっとたまげた 蝸入道
※これは、蝸を描き上げます。

53. 「へのへの もへじ」

へのへの もへ字
※言いながら顔を描き上げます。

54. 「つるには のの虫」

つる・ニ・ハ の・の・ム・し
※言いながら顔を描き上げますが、他の地域では、「蔓
には豆豆(丸丸)虫」とするそうで目が〇に
なります。



55. 女の子の全身の絵書き

くーちゃん しーちゃん リットル テーちゃん・
(頭髮)・一銭貫つて パン買って 一銭貫つて
パン買って 三角定規が四銭で(顔が出来上がる)
縦 縦 横 横 丸書いてちよん 縦 縦 横
横 丸書いてちよん(両腕が出来上がる)・(スカ
ート)・縦 縦 横 横 丸書いてちよん 縦 縦
横 横 丸書いてちよん(両脚が出来て完成)

《相手を攻撃する時の囃子言葉》

56. 「馬鹿 カバ」

馬鹿 カバ まぬけ (或いは「ちんどんや」)
お前の母さん 出臍 (でべそ)

63. 「かつちゃん 数の子」
かつちゃん 数の子 にしんの子

64. 「女の中に」

女の中に 男が一人

57. 「のん気な父さん」

のん気な父さん 毛が三本
電車に轢かれて ペったんこ

65. 「あげようか」

(これ) あげようか

「か」が付くから 考えよう

「よ」がつくから よそう

「そ」がつくから 損だ

「だ」がつくから ダメ

「め」がつくから めっかんこう

「こ」がつくから こつくん

58. 「お前の学校 いい学校」
お前の学校 いい学校
上がって見たら クソだらけ

※特に川向こうとの喧嘩の時に言いました。

※最後の「こつくん」では、相手の頭をげんこ

つで、こつんと叩きます。

59. 「みっちゃん 道々」

みっちゃん 道々 うんこして
紙がないから 手で拭いて
もったいないから なめちゃった

66. 「ドレミっちゃん」

ドレミっちゃん 耳だれ 目は病 (や) ん目

頭の横丁には ハゲがある

蠅が止まって ちよつと すべる

何て 便利な ハゲでしょう

60. 「しごちゃん しがつく」

しいちゃん しがつく
しん左衛門 (ざえもん)
しのこの しん三郎 しにそこなって
しんちよこ しんちよこ

67. 「ろくぶて」

A. 手袋の反対は

B. ろくぶて

※言い終わるとすぐに、Aが六回程Bをたたく。

※例えば「みっちゃん」ですと次のとおりです。

みっちゃん みがつく
みん左衛門 (みんざえもん)
みのこの みん三郎 みにそこなって
みんちよこ みんちよこ

68. 「誰かさんの後ろは蛇の姿」

誰かさんの後ろは 蛇のすゝがた

61. 「のん気な父さん」

のん気な父さん 毛が三本
二階の窓から 落っこって
あいたい くいいたい 何食いたい
天井食いたい ソバ食いたい
お金がないから よしちゃった

《参考：「子供遊」の紹介》

越ヶ谷地区の子供遊びに関しては、越谷市郷土研究会理事の故・山崎善司氏が平成四年七月発行の「越谷言葉 方言と訛集 改補編」の中で触れられています。
今となつては貴重な資料です。

62. 「ひらひら 百貫ひら」

ひらひら 百貫ひら
電車に轢かれて ペっちゃんこ

作成完了日 平成二十二年十月二十六日

2. 越ヶ谷宿を通った

篠原陸郎

弥次さん喜多さん

弥次さん・喜多さんの「東海道中膝栗毛」はあまりにも有名で、享和二年（一八〇二）から文政五年（一八二二）まで十辺舎一九のベストセラーとして続編に続編を重ね、識字率の高い当時の庶民に欠くことの出来ない楽しみの一つであった。

十辺舎一九（一七六五〜一八三二）は、駿河国の町奉行同心の子として生まれたが、武士に見切りをつけ江戸に出て、度々の東海道往復で蓄積した資料をもとに書上げた「膝栗毛」の大ヒットにより式亭三馬とともに滑稽本の二大戯作者と称された。

弥次（郎兵衛）さん喜多（八）さんが日光道中越谷に旅をしていたことはあまり知られていない。嘉永二年（一八四八）に刊行された「奥羽一覽道中膝栗毛」に登場する二人は、越ヶ谷の地を洒落のやりとりで飲んだり食ったり遊覧したりして通りすぎている。

その場面を十辺舎一九全集（日本図書センター刊01・7）より抜粋し紹介してみる。

蒲生村の鯉鈍蕎麦屋で大笑い
又蒲生村では塩煎餅が売られていた

かも村、加茂村とも云っていた蒲生村に入った二人達は上図挿絵の行燈の店に入り、うどんのようなそばきりを食べている。行燈の文字を見て、「うどん そばきり あり（有）やなきや（柳屋）」と在原業平の和歌「・・・あり（有）やなき（無）や」をからませて大笑いしている。又塩煎餅の名物を草加でなく蒲生村で食べているのは興味深い。一枚八文でかなり大きいものだったらしい。

*煎餅が草加から越谷にかけて見られていたであろう裏付けとなる記述である。

桃山を遊覧し大聖寺にお不動さまを参詣

蒲生村から弥次さん喜多さん達は越ヶ谷宿・大沢宿へと足を運ぶ。大沢宿では、宝珠花に至る迄の二里半を「山ではないけど桃山といへり」と賞でている。上図挿絵の光景は、現在と変わらな。彼らもこの中に加わったのだろうか。

又大相模村では「相州大山の不動尊と同時に出来た大静寺（大聖寺）があるから参詣して行かう」とするが、途中洒落の応酬でケンカ？になり、はたしてどうなったか。

間久里の名物「鰻」で一杯

一行は大沢宿をあとに、大房・大林・大里・下蛤（しもまくり）・上蛤（かみまくり）と進む。このらの立場（たてば休息所）に来ると「鰻の名物売店が三四軒あり、辺の沼を鰻沢と云ふ、大枝村近し」と書いている。

一行は「ちやうど時刻到来で、腹がすきや河岸目が丸の内ときたア」と一軒の鰻店に入っていく。そして「江戸っ子だアな、筏はごめんだヨ、ザツと大きひのが賞翫（しょうがん）だア」と注文しているところを見ると、今と同じ串刺の蒲焼だったのだろう。

*筏（いかだ）とは小鰻を竹串で刺した蒲焼

綾瀬川鯉の頭小さく

してよしと

四神地名録巻の四に見えたり水源は足立郡小針領家村にして

元荒川よりながれ

所々の悪水落合葛飾郡

隅田村にて隅田川に入る

阿古屋松草加宿をたち

ける日の條に筑波より

東に山なしわづかに岡の

ごとく見ゆるは鹿島の

山なりまた南に

はなれて低く見ゆるは

下総の椎名山

なりという云々

そばに居ぬ

人は二八の

いも

つなぎ

ありや

なき

やと

しのぶ

うまや路

大沢宿
桃山遊
覧の図

桃の

花

折る

手を

入る

跡も

なし

山花

山の幸

うなぎと

なりし

例あれば

金のつるにぞ

ほり

あてに

ける

越ヶ谷宿の内

大畑東の方に男体

女体の二社あり

備後東の方に臨西寺

（林西寺）

といへる浄土宗の寺

あり寺領廿五石



（このあと粕壁宿へと続く）

3. 越谷の生んだ画家・斎藤豊作

フランスのシャトーと墓

竹村 克男

斎藤豊作は、今から百三十年前の明治十三（一八八〇）年に現・越谷市相模町七丁目で生まれました。大相模尋常小学校、越ヶ谷高等小学校を卒業後、東京美術学校に入学しました。同級生に、青木繁、熊谷守一、児島虎次郎などがいます。明治三十九（一九〇六）年にフランスへ渡り、有島生馬らとともに印象主義と点描画法を学びました。

帰国後、大正三（一九一四）年には二科会の創立に加わり、監査委員となり、第一回展には、自身も九点を出品しています。同年には、来日中のフランスの女流画家カミーユ・サランソンと結婚しました。

大正九（一九二〇）年に離日。フランスでは画家活動を行なうと同時に、友人の小島虎次郎が大原孫三郎に依頼されて行なっていた西洋美術のコレクションに協力し、これが倉敷大原美術館の基礎となっています。

大正十五（一九二六）年には、サルトル県のリッシュュ・プランジエ村にシャトーを購入しています。こちらには児島虎次郎、岡鹿之助、有島生馬、梅原龍三郎などが訪れています。

その後、ドイツのフランス侵攻、パリ陥落、連合軍の勝利などは斎藤家の運命を大きく揺さぶり、豊作も逮捕、拘禁されたりしました。

そして、豊作は拘禁中にかかった結核のため、惜しいかな、釈放後に、亡くなってしまいました。

私は同じ越谷に住んで絵を描く身として、ぜひ一度、シャトーとお墓を訪ねてみたいものだと思いい立ち、井山登志夫氏の「フランスの小さなお城に住む」という著書も参考に訪問しました。今では人手に渡ってはいませんが、豊作が住んでいたころと大きくは変わりないであろう、そのたたずまいの中で、彼の波乱に富む生涯を偲んだことでありました。



斎藤豊作夫妻の墓



斎藤豊作の旧居城



斎藤豊作の旧居城 水彩 竹村克男・画



斎藤豊作の旧居城 水彩 竹村克男・画

4. 明治になって越谷に鷹狩に来た徳川慶喜

田中 利昌

徳川慶喜が明治三十三年六月五日から九日までの五日間、越谷周辺の鶴を捕りに鷹狩に来ている。このあたりは、江戸川筋御猟場と言われて庶民にとっては禁猟区であった。

越谷周辺に鷹狩に来た徳川慶喜一行の主な名前や人数が当時の出羽村の四丁野の大野家（現、宮本町一一一、代々「伊右衛門」を名乗る家柄）の当時の当主と思われる大野伊右衛門（現当主である大野光政氏によれば、光政氏の曾祖父だと思われる）によって記録され、その文書が大野家に残っている。

徳川慶喜とその家臣二名、宮内省関係六名（主猟局長の山口正定、主猟官の秋田虎雄、澤木直行、御鷹取締の田中修三、会計官二名）である。

大野家に宿泊した人は、そのうちの徳川慶喜とその家臣二人のみである。宿泊した日も、五日と八日の二日間である。

徳川慶喜はその謝礼として、大野家に茶料としての十五円を、使用人に対しても合計五円を与えている。

他の宮内省関係者の宿泊場所は、ここ大野家ではなく、江戸時代に本陣を構えていた大沢の大松屋福井家旧本陣である。

光政氏の祖父、大野伊右衛門（明治十九年六月二十日生、昭和四十年に越谷市郷土研究会の初代会長となる）が数え年十四歳の時であった。

出羽村四丁野（現、宮本町）の大野家の古文書による徳川慶喜の当家
宿泊記録二点と、お茶料の領収証、大野家への宿泊の礼状の解読文を次
に紹介する。

【大野家の宿泊記録その一】

明治三十三年六月五日、宮内省主猟局ニテ、本縣下江戸川

筋、御猟場ニ於テ、鶴ノ御鷹狩ニ出張致シ、越谷町

近傍ニ於テ催サレタリ、出張ノ諸氏名ハ、

賓客、前ノ十五代將軍、現今公爵、徳川慶喜公、

宮内省主猟局長兼、主殿頭、正四位、勳三等、山口正定

主猟官兼、侍従、従四位、勳四等、男爵 秋田虎雄

同 属 正八位 澤木直行

同 御鷹取締 田中修三

會計官 式名

徳川家臣 式名

徳川慶喜公ノ旅館ニ當□会田清太郎殿より徳川公ノ為

座敷懇請サレ、不得止、同公爵家臣式人ヲ宿泊セシメタリ、

最モ二夜の宿、依之、茶料トシテ頂戴ス、

※慶喜は明治三十五年（一九〇二）に公爵になっていることから、文中の「現今公爵」
の記述から、この記録は明治三十五年以降に書かれたものである。

【大野家の宿泊記録その二】

明治三十三年六月五日の夜、八日夜、二夜、

徳川慶喜公、并ニ、御猟局長、山口正定殿、

御同道ニテ、當近在へ御鷹獵、鶴ヲ取ニ参ラレ、

右、山口君ハ、旧本陣へ旅泊、徳川殿ハ、拙宅へ、

供式人御連レ、宿泊ス、依テ、下男・下女へととして、

御心附被下候ニ付、配當、左也、

金五十銭 利助 金十銭 定吉 金三十銭 喜三郎

金六十銭 吉蔵 金五十銭 舟 金三十銭 吉蔵
つね

金五十銭 順蔵 金三十銭 舟 金三十銭 きく
ます

金五十銭 芳口 金三十銭 二郎 金三十銭 はな
□ □

金十銭 繁蔵 金三十銭 番頭分 計金五円

【大野家のお茶料領収証】

しょう
證

ひとつ きんじゆうごえんなり おちやりよう

一、金拾五圓也 御茶料

みぎ まさ りようしゆうそうろうなり

右、正二領 収 候 也

いえもん

明治三十三年六月九日 大野伊右衛門

徳川殿

【大野家への宿泊札状】

はいけい、ますますごせいでき きんき
拝啓、益々御清適、欣喜

のいたり さ せんねんしゅつちようのさい
之至、扱て、先年出張之際は、

しゅじゅ(こうじょう) ありがたく
種々御厚情ヲ蒙り、難有、

そのせつ おもうしでのごせんそう
其節、御申出之御染草、

こんかい しゅつたいあいなりそうろうあいだ こづつみびん
今回、出来相成候間、小包便ヲ

もついで はつそういたしそうろう ちやくのうえ
以出、發送致候、着之上ハ

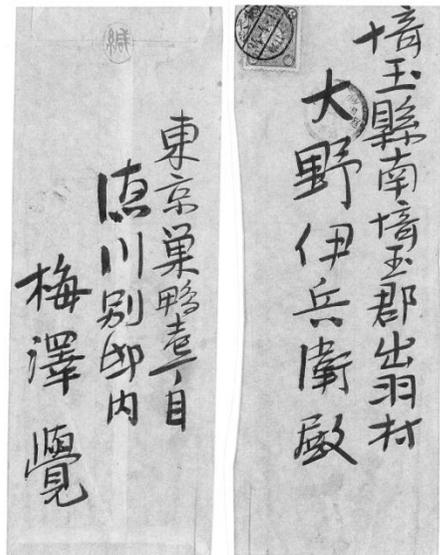
おしらせあいなりたく みぎもうしまいらせそうろう
御報相成度、右申進候、

そうそう とんしゅ
早々 頓首

三十四年四月十五日

うめざわ だいなびん・だて
梅澤 覚

おおのいへえどの
大野伊兵衛殿



※大野光政氏によると、右の宿泊札状の宛名が「大野伊兵衛」となっているが、

「大野伊右衛門」の誤りと思われる、ちなみに当時の当主の襲名以前の名は伊八である。

※この資料の作成にあたっては、大野光政氏からの資料の提供と調査の協力をいただきました。

※古文書の解説には、鈴木秀俊氏の協力を得ました。

5. 越谷市の明治の水準点『高低測量几号』

きこう

秦野 秀明

国土地理院が設置・管理する水準点は、全国の主な国道又は主要地方道に沿った約2kmごとに設置され、その種類は基準、一等、二等、三等で、全国に約22,000点存在する。この水準点により、土地の高さを精密(mm単位)に求めることができる。明治九年(一八七六)七月二十七日、国土地理院の前身の一つである内務省地理寮により、現在とは異なる水準点の様式が布達された。設置された「高低測量几号(几号水準点)」は、現行の水準点としては機能していないが、現在も各地に残存している。明治十二年(一八七九)六月刊行の「内務省地理局雑報第十四号六月」には、ほぼ奥州道中に沿って東京塩竈間の高低測量(水準測量)が行なわれた際の、六十四標の「高低測量几号」の位置の記載がある。

その十四標目に記載されるのが、「西方村字行人塚大相模不動道標」である。大聖寺(大相模不動尊)東門外の路傍に存在する文久二年(一八六二)建立の道標石塔がそれに該当する。加藤幸一氏の調査により、建立当時は日光道中沿いに存在していた可能性が指摘されていた。「高低測量几号」が刻まれていたと推定される道標石塔の正面下部は、地中にコンクリートで固められており、確認できない。

十五標目に記載されるのが、「大澤町字天神前管社華表」である。大沢町の香取神社の二之鳥居で、「天満宮」の扁額が掲げられた文政六年(一八二三)建立の鳥居(華表)の下部に、「高低測量几号」が残存している。こちらも日光道中沿いよりの移転を経ている。

詳しい顛末は筆者が「NPO法人越谷市郷土研究会」のホームページに発表した
・「大沢香取神社の二之鳥居にある「天満宮」の扁額の謎」
・「幻の「西方村字行人塚大相模不動道標」を求めて」
を参照されたい。

※「NPO法人越谷市郷土研究会」ホームページ

<http://www.geocities.jp/a115b/>



○甲第二十八號 (七月二十七日 輪廓略)
當省地理寮於テ高低測量ノ際自今海面ヨリノ高低ヲ表スル記號別紙第一圖式ノ通沿路適宜ノ地ニ於テ在來ノ不朽物ニ彫刻シ又ハ第二圖石柱建設永存ノ管ニ候條爲心得此旨布達候事 (別紙)

復刻版 内閣官報局／編
『法令全書』
第九卷ノ一 明治九年、
原書房、一九七五、
四七二頁 より転載



「二万分之一地図 松戸越ヶ谷近傍第五号(第一師管地方迅速測図)」
 (明治十三年測量 同十七年製版 同二十年九月二十八日出版 同二十一年再販)

に

「高低測量凡号」の刻まれた「西方村字行人塚大相模不動道標」
 の本来の位置等を加筆



大聖寺(大相模不動尊)東門外の路傍
 「西方村字行人塚大相模不動道標」
 (東北東より望む)

6. 明治の大袋村観音山の捕り物一件

原田民自

今から一〇九年前、東武線大袋駅付近に観音山といわれる場所があった。そこは四方を樹木が生い茂り、昼間でも暗く感じられる所で、観音山の頂上には観音様を安置したお堂が建てられていた。そこを四人の盗賊が棲家（すみか）としていたとの情報を越ヶ谷警察署が探知したことでこの捕り物がはじまった。明治三十四年（一九〇一）二月七日付けの東京朝日新聞は次のように伝える。

●観音山の捕物 先日来、埼玉県下に凶暴な盗賊がうろつき各家の土蔵を破って金品を盗み出すこと度々で、したがって警官はあらゆる手配をして厳しく犯人を捜査していたところ、同県南埼玉郡大袋村大字大袋に観音山という山があり、頂上には観音を安置した堂があつて、四方を樹木が生い茂り、昼でも暗く感じられる場所に四人の賊が住みついていた。夜の暗がりになると出入りする様子で、何回となくそのような連中を見掛けた人があるとの情報を越ヶ谷警察署で探知した。それらの者は土蔵を破り得た金品を賭奕や酒色に使い……、越ヶ谷警察署では賊を捕まえるため観音山に逮捕に向かい二名は捕らえたが他の二名は逃走してしまふ。引き続き逃げた賊を捕えるために捜査している。

観音山があつた大袋村は、明治二十二年（一八八九）町村制施行により、袋山村を含めた八村（袋山村・大竹村、大道村、大林村、大房村、恩間村、恩間新田、三野宮村）が合併して南埼玉郡大袋村として成立する。以後、昭和二十九年（一九五四）に越ヶ谷町に編入して大袋村の村名は廃止されたため、現在は大袋という地名はなくなり、東武線の駅名にのみ大袋駅として残されている。

大袋駅を囲む旧大袋村には、「桃山」、「次郎兵衛山」、「島根山」、「のじり山」という山の名が付く名称が多く見られた。観音山は観音堂を安置していることでその名がついたものと考えられる。

東武鉄道が建設工事中の明治三十年（一八九七）ごろ、線路を敷設するための盛り土を、旧大袋村付近の山を切り崩して調達したという話が伝わる。

長い歳月の間、観音山を含むほとんどの山が地域開発により切り崩され宅地化されてしまった。

●観音山の捕物 先頃來埼玉縣下に強賊徘徊し
 各家の土蔵を破りて金品を盗み出す事度々なれど
 其官の百万手配をなし破しく犯人を捜査し居りし
 處茲に同縣南埼玉郡大袋村大字大袋に觀音山
 といふ山あり頂上に觀音を安置せし堂あり四面
 に樹木生茂りて晝尙暗く覺ゆる處に四人の賊棲所
 を辨へ夜候を待つて出入する様子にて屢々其者等
 を見附けたるものありとの事を越ヶ谷警署者にて
 聞知り其人物を探りしに其者等ハ茨城縣真壁郡眞
 壁町六丁目十三出地新平長濱本金次郎(二十)東京府
 下町是立郡千住在竹の塚村百五十七出地平民森谷
 平三郎(三十)外二人にて正しく各處の土蔵を破り其
 中得たる金品にて博奕又ハ酒色に荒み居り現に
 九月卅一日の夜吉川警察分署管内二ヶ所に於て土
 蔵の錠前を割にてぬちりけ衣類數十點を盗取した
 る者なる事判然せしに付去る二日之が逃捕に向ひ
 右並次郎平三郎の二名を捕へ得たるが他の二名の
 逃走したるに付引續き捕物に向ひ居れりといふ

観音山の捕物 明治34年(1901)2月7日付け 東京朝日新聞

7. 下間久里の獅子舞と辻切り

増岡 武司

埼玉県指定無形民俗文化財として大切にその伝統が受け継がれてきた下間久里の獅子舞は、文禄三年（一五九四）に京都から伝わったとされ、この獅子舞はその後、周辺の春日部市赤沼・同銚子口、庄和町中野・野田市清水の各獅子舞に伝わったことがわかつている。

毎年七月十五日に実施されてきた下間久里の獅子舞は、雨下無双角兵衛流（あめのしたむそうかくべえりゆう）と呼ばれ、埼玉県東部及び千葉県西部の獅子舞の源流となっていたのである。

それらの獅子舞が、平成十六年（二〇〇四）四月十八日に、源流となったこの地に初めて一同に会し、記念大祭の先陣を切って下間久里から太夫獅子・女獅子・中獅子の三頭一組が勇壮な舞を披露、その後、各地域それぞれ独特の舞が披露され、「下間久里の獅子舞伝承四百年記念大祭」が盛大に実施された。これらを見ようと越谷市内外から二千人を超す大勢の人々が参集したという。

七月十五日に毎年行われてきた下間久里の獅子舞は、袴をはき、揃いの衣装で腰に太鼓をつけた太夫獅子・中獅子・女獅子の三頭一組が家内安全・五穀豊穰を祈って香取神社をはじめ、地区内の家庭を舞って歩く。最後の場面では、大里地区との村境において、夜が更けてから太夫による「辻切り」が行われ、十一時頃にすべてが終了する。その場所は、旧日光街道と大袋駅に通じる道、大里村の稻荷神社に通じる道との十字路周辺である。昭和三十七年に埼玉県より無形民俗文化財に指定されている。

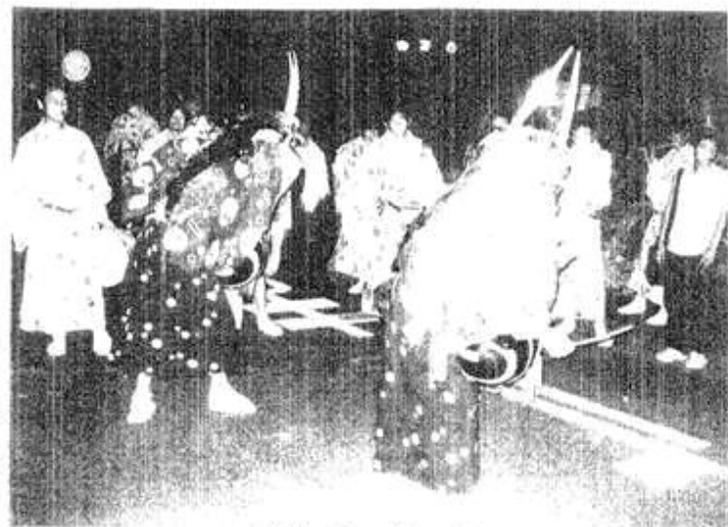
「辻切り」は、「道切り」とも呼ばれる民俗的な行事で、一般的には、村の入口に注連縄を張り、或いは、藁で作った大蛇などを掛けて、疫病や悪霊が村に入ってくるのを遮断して防ごうとするものである。

ここ下間久里の獅子舞の最後の辻切りは、一般的に見られる辻切りの内容とは違って、ここだけの独自性のあるものである。

すなわち、獅子舞を行いながら村中の悪魔を追い詰めた後、太夫が大里村との村境で御幣と本物の日本刀（刃先は落としてある）を持って追い出し、入って来られないようにしている。

下間久里の獅子舞の今後について第二十五代太夫松崎庄蔵氏に伺うと、「この伝統を保存継承していくには、なんといいっても地域の皆さんの協力と継承者の育成が大切で、そのためには地域の若い人たちと自分の孫に夢を託している」とのことである。

※下間久里の獅子舞の写真が裏表紙に掲載されています。



下間久里の獅子舞



下間久里の獅子舞 日本刀と御幣を持つての辻切り

越ヶ谷 一り

三十一

名物

鬼焼



仮名垣魯文「日光道中膝栗毛」

(蓬左文庫蔵) より (部分)

清水秋全「武奥増補行程記」(国立国会図書館蔵) より (部分)

大百姓

次郎右エ門



此裏小堰へ
いけすにいつも
敷千うなぎを
かこへ置候
なますもこれあり
よし

○名物
筋骨つよくし、
精気をます食
性能毒に出たり

○名物
筋骨つよくし、
精気をます食
性能毒に出たり

○名物
筋骨つよくし、
精気をます食
性能毒に出たり

8. 江戸時代の越谷名物は「焼き米」と「鰻」

宮川 進

旅の楽しさは、今もその土地の名物を食べることに。天下の五街道である日光道中（街道）の越谷宿の名物は何だったのでしようか。

当時の紀行文に書かれているものは「焼き米」と「鰻」です。

この「焼き米」と「鰻」が両方書かれているものの最初は、盛岡藩主の求めにより藩士・清水秋全が書いた『武奥増補行程記』で、蒲生のあたりに「名代屋焼き米」、上間久里と下間久里の中間に「名物うなぎ蒲焼」とあります。（寛延四（一七五二）年） 画家・谷文兆の弟の谷元旦は蝦夷探検に出かける途中に越谷を通り、「加茂村蒲生に至る。此辺焼米を名物とす」
「その続き、問久里真栗也。鰻の蒲焼、名物也」（寛政十一（一七九九）年・『蝦夷蓋開日記』とし、同じ年、同様に蝦夷探検に出かけた遠山景晋（遠山金四郎景元の父）は、著書『未曾有記』に「加茂、左、家統、やき米名物」「まくり、休。名物の鰻魚あり」、三年後の享和二（一八〇二）年に蝦夷地見回りに出かけた幕吏が書いたと思われる『東案内記』には「加茂村 家並に焼米あきのふ」「マクリ村 此里家数少し有りて蒲焼の名物なり 乍去り（さりながら）ちと高値なりし」としています。

焼米を、元禄十六（一七〇三）年の水野長福の『結城使行』は「やき米を道にひさぐこと 加茂村ではあり・・・」とし、十返舎一九に真似た『日光道中膝栗毛』（安政四（一八五七）年）の仮名垣魯文は「越谷 名物鬼焼」を挿絵としています。

鰻だけのものには『日光巡拝図誌』（今井中）、『日本駅程見聞雑記』（安永法眼）、『増補新訂日光道中行程安見絵図』（作者不明）、『五街道細見記』（作者不明）などがあり、特筆すべきは文政一（一八一八）年に江戸の文人・中央齋が書いた『陸奥日記』に「まくりといふ所に名物うなぎのかば焼有りしかどく名物のうなぎはうまく」とあること、また渡邊崱山が文政十三（一八三〇）年の『全楽堂日録』に「マクリという処に鰻をひさぐ家あり（中略）此家鰻名におひたる（後略）」と記し、その味を味わってくれていることでしょう。